

「語ろうデー」の実施における参加者と実践者の気付き

片岡元子 吉川暢子 松井剛太 桑原育子
西宇宏美 藤井朋子 谷口美奈 海田美智子 法兼あす香 奈良泰世

問題・目的

■ 幼稚園における「園内研修」とは

- ・「教師間の日常の協力と話し合いを深め、専門性を高め合う場」(文部科学省 2018)。
- ・各幼稚園において保育の質の向上や、教師の専門性を高めていくために、園内研修を活性化するための取り組みが進められている。
- ・預かり保育の実施による長時間保育、行事や地域との交流などに向けた準備等で忙殺され、なかなか園内研修の時間を確保できていない。
- ・濱名ら(2015)が「保育者は園内研修での語り合いにおいて困難さを感じている」と指摘するように、感情を開示して本音で語り合い、主体的に参加していくことは容易ではない。

■ 附属学校の役割 松木(2017)

- ・学び続ける教師を支えることが附属学校の重要な役割だと指摘。
- ・「都道府県の教育センターは子どものいない研修センターであり、附属学校は子どものいる教員研修学校としての特徴をアピールしていくことができる」

■ 公開カンファレンスの外部公開 松本ら(2012, 2013)

- ・公開カンファレンスの外部への公開によって
 - ※他園からの参加者
 - 子どものことを語るカンファレンスを体験できる
 - 多様な意見を聞く機会となる
 - 保育者としての成長に寄与する可能性
 - ※内部の保育者
 - 新たな視点や新鮮な意見を与える

■ 香川大学教育学部附属幼稚園では

- ・研究発表会が、外部の保育者と学び合うことのできる唯一の機会。
- ・当日は、200名を越える幼児教育関係者が参加し、普段の子どもの様子を参観したり、活発な意見交換を行ったりしていくことは難しい。
- ・正規の教員の全てが小学校との人事交流により異動してきており、地域の公立幼稚園の教員との具体的な交流の機会もそう多くはない。
- ・松木の提案する「子どものいる研修学校としての役割」を果たしているとは言い難い。
- ・2018年度より、保育実践や保育討議を公立幼稚園等の教員にひらく「保育を語ろうデー」(以下「語ろうデー」と記す)を実施。

■ 目的

- ・「語ろうデー」の参加者である公立幼稚園等の教員と実践者である附属幼稚園教員の気付きを探ることにより、「語ろうデー」の成果と課題を明らかにするとともに、地域にひらかれた附属幼稚園の在りについて検討していきたい。

語ろうデーの手続き

■ 概要

- ・3回実施
 - 2018年5月23日、6月6日 7月18日
- ・近隣の幼稚園等への周知
- ・午前: 保育参観
- ・午後: 保育討議
 - 協議1 保育について
 - 協議2 事例検討
- ・参加人数を10名程度に制限

■ 参加者

- ・外部の参加者 合計36名
 - 公立幼稚園教員 のべ31名
 - 小学校教員 のべ 5名
 - 保育所保育士 0名

()終日参加者

		外部の参加者	大学教員
1	5月23日	11(6)名	2名
2	6月6日	11(7)名	3名
3	7月18日	14(10)名	2名
	合計	36(23)名	7名



※ 午後からの保育協議は、お互いの顔が見えるように 大きな円になって実施

参加者へのアンケート

■ アンケート調査への手続き

- ・終日参加者23名にアンケート用紙を配布
- ・一週間後を目途に郵送にて回収(有効回答数23)
- ・小学校教員の回答(5)を除く公立幼稚園教員の回答(18)より考察
- ・4つの質問について取り上げて考察
 - ①参加の理由、②参加して良かったか、③今後参加したいか
 - ④参加によって感じたり、考えたり、学んだりしたこと

■ アンケート調査の結果

- ① 参加の理由
 - ・園長にすすめられたから(18名中12名)
 - ・学びたい内容について記述「環境を見たい」(5名) 等

② 参加して良かったか

よかった	まあよかった	あまりよくなかった	よくなかった
16	2	0	0

③ 今後参加したいか

ぜひ参加したい	できれば参加したい	あまり参加したくない	参加したくない
16	2	0	0

④ 参加によって感じたり、考えたり、学んだりしたこと

	主な記入例
園内研修の進め方	・園内研修のすすめ方を学んだ。
多様な意見がある	・一人の子どもの気持ちについて、いろいろな見方ができるのだと感じた。 ・いろいろな角度から意見が出てきて驚いた。 ・いろいろな視点があり、私と同じような考えの先生もいればそうでない先生もいた。
討議の雰囲気 教員集団のかかわり	・笑いあり涙ありでとても温かい雰囲気。 ・勤務園では言いにくいことも、いろいろな方向からアドバイスをもらえて嬉しかった。 ・「的外れなことを発言していないか」と不安だったが、私の意見も真剣に聞いてくれて、途中から安心した。 ・思ったことをズバズバ言ってざっばらんに笑いながら本音トークする。 ・自分の思うことを素直に発言し、誰も責め立てるようなことを言わない。 ・保育者が揺れ動いていることをさらけ出すことができている本音の事例研に参加できたような気がした。 ・教師間の連携や関係がないと子どものための環境やかかわりはできないと感じた。
自分の振り返り 今後に向けて	・固定された考えになっていたが、違った見方ができるようになった気がする。 ・先生方の熱い思いや学び続けようとする姿勢を感じ、頑張らなくてはいけないと思った。 ・先生同士で話し合うことのできる雰囲気づくりと時間確保などを考えていきたい。 ・同年代の先生も巻き込んで保育が楽しいと思える先生を増やしていきたい。

■ アンケート調査の考察

① 参加の理由

- 参加者の多くが園長のすすめによって参加。
- 園の教員全員が参加できるように行事等を調整している園もあった。
- 園長は、園の職員に研修(公開保育の参観、保育討議への参加)の機会を与えたいと考えている。

② 参加して良かったか / ③ 今後参加したいか

- 参加者のすべてが、参加について肯定的な評価をした。
- 次回の参加にも前向きな回答をしている。

④ 参加によって感じたり、考えたり、学んだりしたこと

- 「語ろうデー」への参加が、子どものことを語るカンファレンスを体験したり、多様な意見を聞く機会となったりしている。
- 子どもの見取りや遊びに対する考え方は様々であり、いろいろな視点を出し合うからこそ自分の保育観が広がることを実感したようだ。
- 一番多かった記述は、討議の雰囲気や附属幼稚園の教員集団に関するものだった。「思ったことをズバズバ言ってざっくばらんに笑いながら本音トーク」することへの驚きは、勤務園での園内研修ではそのような語り合いができていないことの裏返しだろう。

附属幼稚園保育者へのアンケート

■ アンケート調査への手続き

- 3回の実施を終えた8月にアンケート用紙を配布
- 附属幼稚園教員7名(副園長、担任教諭3、養護教諭1、補助教諭2)
- 有効回答数7

④ 4つの質問について取り上げて考察

- ①実施して良かったか、②来年度も実施したいか
③実施による気付きや学び ④今後取り組んでいきたいこと

■ アンケート調査の結果

① 実施して良かったか

よかった	まあよかった	あまりよくなかった	よくなかった
7	0	0	0

② 来年度も実施したいか

ぜひ実施したい	できれば実施したい	あまり実施したくない	実施したくない
6	1	0	0

③実施による気付きや学び ④今後取り組んでいきたいこと

	実施による学びや気付き	今後取り組んでいきたいこと
A教師 (附属幼稚園 1年目)	・「今の自分がいかに無自覚的に自分の見たいように子どもを見ていたのか」を自覚できたこと。 ・子どものありのままを受け入れることの難しさと大切さ。	・他園と保育に対する考え方や大切にしていることに大きな違いを感じたので、それを発信したり、保育をみてもらうことで感じてもらえたりすることが大切。
B教師 (附属幼稚園 7年目)	・自分がどんな環境の中で保育をしているのかを客観的に見ることができた。 ・自分に自信がなくよく悩み、よく分からない…と思うことが多いけど、それでいいのだと思えたこと。 ・2回司会をさせてもらって、「語ってもらおうこと」の難しさや面白さについて考えた。	・理論と実践の発信。 ・他園の課題を知り私たちの園として提案していけるものを見出すこと。 ・幼小連携や10の姿などにおける具体的な取り組みや成果
C教師 (附属幼稚園 10年目)	・(他園では)子どもにとって大好きな、時に危険をはらむ遊びが、しないさせない遊びとなっていること。 ・子どもの過程を理解した上で子どもの思いと教師の思いや考えを行き交わす過程を大切にしようと思った。 ・附属では当たり前で、他園では難しい遊びがどれほど子どもたちにとって魅力的で学びの多い遊びであるかを、どのように発信していけばよいのか…と考えさせられた。	・ゆったりとした時間での公開保育の実施。毎年実施している研究会も大切だが、語ろうデーのように、研究会とは質も雰囲気も違った話し合いも大切だと思った。 ・事例検討の大切さの発信。多様な意見を行き交わしながら、保育や子どもについて考えている雰囲気を伝えられるといいな。そのためには、私たちの園風を保ち、進化、発展させていく志が何より大切。

■ アンケート結果の考察

①実施して良かったか/② 来年度も実施したいか

- 「語ろうデー」に向けた準備や指導案作りなど業務量が増加したことは否定できないが、「語ろうデー」の実施について全員が肯定的な評価をし来年度もやりたい」と回答していた。

③ 実施による気付きや学び

- A教師(1年目)は、自身の子どもの見方が無自覚だったことの気付きにふれている。
- B教師(7年目)は、経験年数が長くなってきてもなお悩み続ける自分自身について、職場の環境、そして園でのミドルリーダーとしての役割についても言及している。
- C教師(10年目)は、自園と他園の違いを踏まえた上で、子どもにとって重要な遊びの意味について改めて考え、そのことをどのように発信していくかに思いを寄せている。
- 初任者、次期のリーダー、園の中心的存在である3名の学級担任は、それぞれのキャリアに応じた気付きや学びを得ることが出来ている。
- 特にベテランのC教師は、自由記述欄に「これまでにやったことのないことをしたことが、新鮮で単純に面白かった」と記している。

④ 今後取り組みたいこと

- 3名が自園の保育や保育討議を広く発信していくことの重要性について記述しており、地域にひらかれた附属幼稚園の在り方の模索につながった。
- 発信していくためには、C教師が記述しているように自園の保育の充実がこれまで以上に欠かせない。

まとめ

■ 参加者

- 「語ろうデー」への参加を通して、保育を語る際に多様な視点で話し合うことにより自身の子どもの見方や 保育に対する考え方が広がることを実感したようだ。
- 様々な視点で話し合いを行うためには、温かな雰囲気や教員集団の関係性が重要であることも感じた。園内の研修について、何かを変えたい、変わりたいと感じたようだ。
- 参加者が感じたり、考えたり、学んだりしたことが、自園に戻ってから、具体的な保育の見直しにつながっていくことが重要である。そのためには、継続的な参加や、「語ろうデー」の後のフォローなど、「語ろうデー」と各参加者の園での園内研修がリンクしていく工夫や仕掛けが求められる。
- 管理職の意識の変容も不可欠であり、どのようにアプローチしていくか考えていく必要がある。

■ 附属幼稚園教員

- 「語ろうデー」の実施により、園の外に目をひらく機会となった。公立園の現状や課題に気付き、それを踏まえ、地域の幼児教育の改善や充実に願い発信していくことの重要性を感じることができた。
- 他園の状況を知ることにより自園において学び合う教員集団が構築されていることの意味にも気付くことができた。それらのことが、自分たちの実践に対する自信となったとともに、さらに自園の保育の充実を図っていくことが求められていることにも気付くことができた。

■ 今後

- 「子どものいる教員研修学校」としての附属幼稚園の役割を考えながら、自園における保育の充実と地域への発信という2つの使命を担う「語ろうデー」の取り組みについて実践を通して検討していきたい。



6月 「たまった雨水を落とせ」大作戦



7月 セミ取りに夢中